子供の力

第二號

昭和三年十一月五日納本
（昭和三年十一月十日發行）第一卷 第二號

發刊を稱へて

湯本校　あつし生

▲近代文明のあらゆるボイコットをあらゆる强烈な線が彼等を環つてゐます。
▲彼等は十世紀以前の大人の世界にも稀な科學者です藝術家です道德學者です。
▲「美しきゴムマリよ」と子供達を呼んでブールキーはこう言ひました。
▲「美しく又殘忍なる人間よ」と私達を呼んでこう言ひました。
▲ゴムマリのもつ彈力性の中に美と惡の二元に成長する生命力を見ます。
▲美にせよ惡にせよ潑溂たる偉大な生命力は確かな彼等の力です。
▲二十世紀の子供は天使の樣な美しさばかりではないのです。
▲より深遠なる惡魔の世界も彼等の中に生長します。
▲子供達のもつゴムマリ性こそは。天使と惡魔の混合体です。混合体こそ力のありかです彼等の力は無現へと活動を發展を存續します。
▲この意味に於て子供の力を信じそして週刊「子供の力」を稱へるものです。
▲兒童の發達を豫想と言ふ場所に確信して始めて教育が可能であると同じ樣に「子供の力」を信じて始めて發刊の意義を稱へるものです。
▲十字の文字の列の中にもほんとうの子供の姿が見へるときそれは尊い彼等の創作です。
▲私達の子供　それは斷然私達の子供です湯本の子供です、稗貫の子供です。
▲この背景にこの信念に私は御社の發展を祈ります。

目次

御大典を祝して　子供の力社講記
童話　鹿踊りのはじまり　宮澤賢治
童話　越峠　小田島柏龍
僕の教育方針　花卷土木管區主幹小泉敬吾
宮澤善治氏夫人　麗はしい家庭の平和
菊のはなし　杉村松之助
折々の歌　和賀郡土澤町　よみ子
兒童文苑
乞食　黑澤尻小學校　高橋やそ
童謡に就いて　霜夜の狐　土澤小學校　高橋芳夫
編輯室から

奉祝御大禮

大禮奉祝唱歌

一

三種の神器　うけつぎて
天津日嗣の　御位に
わが大君の　即きたまふ
かしこき今日の　大御典
祝へ祝へ　いざ祝へ

二

悠久主水の田の　新稻を
神饌とささげて　皇祖に
在すが如く　仕へます
御代の初の　大御典
祝へ祝へ　いざ祝へ

三

神の御代より　傳れる
古き御國の　新しく
日々に進みて　榮えゆく
我が君が代の　大御典
祝へ祝へ　いざ祝へ

聖壽萬歳

御大典を祝して

子供の力社謹記

今日といふ今日こそは、世界中最も偉大な我が大君御即位の御大典として、私共八千萬の赤子は衷心から御祝申上げることが出來る、いとも目出度い日であります。

申すまでもなく今年は神武天皇が改めて國を建てられてから二千五百八十八年目で、御歴代から申し上ぐれば今上陛下は百二十四代目にわたらせられるのであります。

そしてこれからも何千何萬年代と彌榮に榮えまして天壤と共に窮りがないのであります。

——◇——

かうした立派な國は人類の世が創つてこのかた世界中何處を尋ねてもないのであります。從つてかういふ御國に生れた私共程幸福な國民は又と何處にもないのであります。

そこで私共は今日の此のお目度いよき日を記念にぜひ私共の國はかやうに立派でそして幸福であることをよつく腦裡に刻んでおきたいと思ひます。

——◇——

我が大日本帝國は他の國のやうに天子樣も國民も他人の寄合同志のやうにして出來た國ではなく全くその本源を同うして水入らずの親子の樣に出來てをるのであります。即ち神武天皇が改めて國を建てられるづつと〳〵以前の御先祖が第一番の御本源で、その直系は皇室の御先祖、その傍系は私共國民の先祖なのであります。直系としてお生れになられたお方は御代々お首とも大御親ともなられ、傍系として生れた私共の先祖達はその臣とも子ともなつてをつたのであります。

——◇——

そして神武天皇が改めて國を建てられ天皇の御位に即かれてからはその御正系は御代々天皇と申し奉り、傍系の者は臣民といふことになつたのであります。ですからその名に於てまた、義に於ては君と臣とに明かに分れてをりますけれどもその情に於ては父子の間がらになつてをるのです。從つて陛下は私共を其の子として可愛がれ、私共は陛下を大父君として慕ひ敬ひ奉るのでありますから上も下も平和の裡に安心して幸福な生活を送ることが出來るのであります。

こゝは理くつや何で無理やりに造上げた外國とはてんでちがふ所で我帝國の偉くそして立派なところなのです。

——◇——

又昔から我が國を神國と稱へてをりますが、之れがつまり、神樣は國のお手本として世界中の國々から別段に我が國をお選びになられたので我が國はどこまでもその神樣の御心にかなふやうに國を建て且つ保つて來たからであります。ですから我大日本帝國は單に自分の國を立派に立てゝいくばかりでなく、だん〳〵世界の國々をさういふ風に指導していくべき大きな使命を神樣から授けられてをるのであります。

——◇——

今日はかういふ立派にして、深い〳〵意義のある我帝國の御元首であらせらるゝ陛下の御大典なのであります。

いざ奉祝しませう、腹一ぱいのまごゝろをさゝげて。

陛下は御若年に渡らせられるけれども、光文光武且つ御仁德に富ませられる、まことに稀れに仰ぎ

栃だんご
栃のだんごは
結構だが
となりにいからだ
うんながす
青じろ番兵は
氣にかかる。
青しろ番兵は
ふんにやふにや
吠えるもさないば
泣ぐもない
癇せて長くて
ぶぢぶぢで
どごが口だが
あだまだが
ひでりあがりの
なめぐぢら
走りながら廻りながら踊りながら、鹿は

◇…たびたび…◇

風のやうに進んで手拭を角でついたり足でふんだりしました嘉十の手拭はかあいさうに泥がついてところどころ穴さへあきました。

そこで鹿のめぐりはだんだんゆるやかになりました。

「おう、こんだ團子を食ふばかりだぢよ。」
「おう、にだ團子だぢよ。」
「おう、まんまるけぢよ。」
「おう、はんぐはぐ。」
「おう、すつこんすつこ。」
「おう、けつこう。」

鹿はそれからみんなばらばらになつて、

◇…四方から…◇

栃の團子をかこんで集りました。

そしていちばんはじめに手前に進んだ鹿から、一口づゝ團子を食べました六疋めの鹿はやつと豆粒のくらゐを食べただけです。

鹿はそれからまた環になつて、ぐるぐるぐるぐるめぐりあるきました。

嘉十はもう

◇…あんまり…◇

よく鹿を見ましたので、じぶんまでが鹿のやうな氣がして、いまにもとび出さうとしましたが、じぶんる大きな手かすぐ目にはいりましたので、やつぱりだめだと思ひながらまた息をこらしました。

太陽はこのとき、ちやうどはんの木の梢の中ほどに

◇…がゝつて…◇

少し黄色にかゞやいてゐました。鹿のめぐりはまただんだんゆるやかになつて、たかひにせはしくうなづき合ひ、やがて一列に太陽に向いて、それを拜むやうにしてまつすぐに立つたのでした嘉十はもうたうに夢のやうにそれに見とれてゐたのです。

一ばん右はじに立つた鹿は

◇…細い聲で…◇

うたひました。

「はんの木の
みどりみぢんの葉の
向さ
ぢやらんもららんの
お日さんかゞる。」

その水晶の笛のやうなこゑに、嘉十は目をつふつてふるひ上りました。右から

◇…二番目の…◇

鹿は、にはかに飛び上つて、それからからだを波のやうにうねらせながらみんなの間を縫つてはせまはりたびたび太陽の方に頭を下げました。それからじぶんのところに戻るやびたりととまつてうたひました。

「お日さんを、
せながさしよへば
はんの木も
くだげで光る
鐵のかんがみ」

はあと嘉十もこつちでその立派な太陽と

◇…はんの木…◇

を拜みました。右から二番目の鹿は首をせはしく上げたり下げたりしてうたひました。

「お日さんは
はんの木の向さ
降りでても
すすぎ、ぎんがぎが
まぶしまんぶし。」

ほんたうにすすきはみんな、まつ白な火のやのに燃えたのです。

「ぎんがぎがの
すすきの中さ立ぢ上る
はんの木のすねの
長んがいかばぼうし。」

五番の鹿はひくく首をたれて、もう

◇…つぶやく…◇

やうにうたひ出してゐました。

「ぎんがぎがの
すすきの底の日暮かた
苦の野はらを
蟻でも行かず。」

このとき鹿はみな首をたれてゐましたが、六番目が

◇…にはかに…◇

首をりんと上げてうたひました。

「ぎんがぎがの
すすきの底でそつこりと
咲ぐ梅ばぢの
愛どしおえどし。」

鹿はそれからみんな、みぢかく笛のやうに鳴いてはねあがり、はげしくはげしくまはりました。北から冷たい風が來て、ひゆうと鳴り、はんの木はほんたうに

◇…くだけた…◇

鐵の鏡のやうにかがやきかちんかちんと葉と葉がすれ合つて音を立てたやうにさへ思はれ、すゝきの穂までが鹿にまじつて一しよにぐるぐるまはつてゐるやうに見えました。

嘉十はもう全くじぶんと鹿とのちがひを忘れて、

「ほう、やれ、やれい。」

と叫びながらすすきのかげからとびだしました。

鹿は

◇…驚ろいて…◇

一度に竿のやうに立ちあがり、それからはやてに吹かれた木の葉のやうにからだを斜にして逃げだしました。銀のすすきの波をわけ、かゞやく夕日の流れをみだしてはるかにはるかににげてゆき、そのとほつたあとのすすきは靜な湖の水脈のやうにいつまでも

◇…ざらざら…◇

光つてをりました。

そこで嘉十はちよつとにが笑ひをしながら、泥のついて穴のあいた手拭をひろつて、じぶんもまた西の方にあるき始めたのです。

それから、さうさう、苦の野原の夕陽の中で、私はこのはなしをすきとほつた秋の風からきいたのです。（をはり）

童話　越兼峠

小田島柏龍

△第二回▽

ところがかういふわけでした。

鬼婆は九年程前にやはり隣國に住んでをりましたそれで自分と娘と、娘といつたつて三十近の婆でしたが、それには可愛い今年生れたばかりの男の子がありました。婆さんのかあいがるのも勿論でした。或る時婆さんは子守をして、母は田畑に働に行きました。母は

夕方になつて

戻つて來ましたが、いつも夕飯のしたくをしてをる婆さんは見えません。

「さてどうしたことだ。」

◇いくら尋ねて見ても影も形も見えません。

それもその筈、恐ろしいことには婆はふと變な氣になりまして、脊中に子供をおぶつたまゝ山の中の方をさしてずん、ずん何物かを追ふやうにして我知らずにいつてしまつたのでした。

氣のついたときには、

脊中の子供は

居りませんでした。山の奥の奥の暗い所まで來てをりました。さあ、氣になるのは子供です。いくら尋ねても尋ねても子供の姿は見えません。もう尋ねあぐんで居る時、ふと山賊に出合ひ、それが縁で山賊の手下となつてしまひ、家にかへることも出來ず、遂にこの山のふもとに、家をたてゝ山賊としめし合せて悪い事ばかりはたらいてゐたのですした。からもとは

あたりまへの

一人の女であります。婆はかあいい子供を見えなくしたことを思ひ出して今こゝにをる子供の年位だと思つて、この子供の

ことをくはしく聞くのでした。

子供は九年前のこと、或る獵師が「今日は獲物もない、どうして歸らうか。」と、あちらこちらと獲物をさがしてをりましたが、どつかで子供の泣聲。「さて變だな」と

聲をたよりに

行つて見ると、一人の可愛い子供は捨てられてをりました。

「オヤ〳〵こんな所に誰が。」と、あたりを見廻はすと、ずつと向ふにたくさん立ちならんだ木の間に、チラチラと一人の老婆が何物かを追ふやうに上の方を見たまゝ、はるかかなたの方へと行つてしまひました。「オヽヽヽ〳〵。」と聲を限りに呼かけたが、答へるものは木立にひゞく音ばかり婆は何を求めるのか

もう影も形も

見えなくなつてしまひました。

獵師は「オ、さうだ〳〵己れは子供がないもんだから神さまは下さつたのだ。」とすぐ家に連れかへそだてました。名を長右衛門とつけました。

長右衛門はずん〳〵成長してもう九才になりましたけれども自分のほんたうの親でないことを、

どこからとも

なく知りましたので、毎日〳〵父母にたづねるのでした。

父母は「いやお前はほんたうの子だ。」といふばかりで知らせてくれませんやつとお隣の家から聞いた所が前申したやうな事情がわかりました。それで子供は隣國から隣國へと、あてもない旅をつゞけて、ほんたうの親をたづねる氣で、夜こつそり出てまゐりましたのです。

子供はその

わかりにくい

言葉で、老婆にしつかり話しました。

老婆はだまつて聞いてをりましたが。

「オヽヽそその婆は己れじや、オヽヽヽさてはお前は九年前、己れが〳〵おとした子供が。」ウヲヽヽと泣きくづれました。

長右衛門の喜びはどんなでしたらう……。

やがて二人はこの越後峠をも

難なく越えて

隣國の母の元へ急いで行きました、それからと云ふものは恐しかつた越後峠も平和となり、要婆と言はれたお婆さんも幸福な暮しをするやうになつたと云ふことであります。（おはり）

家庭欄

僕の教育方針

花巻土木管區主幹
小泉敬吾

△活動映畫の觀覽禁　寫眞を觀ることを絶對に禁止してをる。利する點

自分は子供等に對し活動も幾らかはあるにちがひないが弊害が尙更多いからである。からだに及ぼす弊害からいへば目を損ざしたり、殊に夜間の活動になるとそれは勿論全身の疲勞を來すことが甚しい。又之れを心の方から考へれば、如何に教育映畫といひながら、必ずしも教育映畫たらざるものがよくある。まして一般の映畫に於ては非教育的な映畫が多い。大人の映畫に對する興味と子供のそれとは大分距離がある。それを大人を標準として畫面を選擇するからである。大人なれば頭が殆んど定つてをるから惡い畫面に接しても其の影響を蒙らないといつてもよいが、感受性の強い子供の頭はシッカリ其の活動に捕へられて頓な横道に入ることがある。又活動映畫そのもの以外に觀覽者同志の行動から蒙る惡弊も甚大なものであるかやうに活動は心身何れ

の方面から眺めても弊害のみ多く神益する所が尠ないのである。

△物品の給與

子供に對しおあしを與れることも嚴禁してをる。之れも弊害が多いからである。例へば買食の場合であるが近頃警察では賣店に對し衛生上から喧しく取締つてをるが何時も〳〵監視しても居られぬから其處に衛生上色々な暗いことが行はれるのである。のみならず食合せといふこともある、どんな惡い食合せをするか分らぬ。又之れを子供の仕つけから見ても甚だよくない。又學用品を購入する場合そこにまゝ不正行爲が行はるゝ餘地がある十錢の學用品を買ふことゝして十錢貰ふにしても八錢は實際の學用品代に充て二錢は買食の方に曲げるやうなことは往々見る所である。何れにしても金錢給與は子供等を害ふ場合が多い。更に之れを經濟的に眺めた場合は如何之れが教養といふことゝは何等關係ないやうに思はれるが、さうではない。食ひ物でも學用品でも之れをまとめて、直接家で買ふとすればよい品を安く買ふことになるからいふ經濟觀念は知らず〳〵子供の頭に泌み込んでゆくことゝ思ふ。又一面濫費を防止することになる。金錢でも物品でも惡用濫費は甚だしからぬことであるが、物品給與によつて之れが避けられることになる。之れが經濟生活の教養上多大の基礎を形造ることになると思ふ。

△兄弟喧嘩の仲裁

兄弟喧嘩は何處にもよくあることだ。自分の家でも時々それを見受ける。ところで之れが仲裁は母の手にかけず、一切自分の手で決裁する。母性はどうしても感情的で、そして威嚴がない。故にやゝもすれば感情に走つて誤つた裁斷を下すことある。又正しい裁斷を下したとするも威令が行はれぬ。故に往々子供同志の喧嘩がおろか、遂に親子總動員的喧嘩になることのあるのは珍しくない。故に喧嘩の仲裁には母親は不適任である。自分はかやうな見解から兄弟喧嘩の仲裁を一手に引受けてをる。

◁教育參考▷

家庭訪問

（2）

宮澤善治氏夫人

麗はしい家庭の平和

どこまでも正しい理性愛

一族團らんに輝く理由

記者はこのお婆さんの御話でつくづく感じましたあの秋霜烈日といつたやうなお爺さん（善治さんの父）が長孫直治さんの中等學校入りを頑として斷つた場合、若しお婆さん（直治さんの母）にして、普通の婦女子であつたなら、盲目愛にひかれて必ずや其子の肩を持ちその背後にかくれて煽動を試み、お爺さんに對して反抗せしめたい所であります。然しさうしたなら最後、その家庭は忽ち波瀾を卷起し、お爺さんとの衝突は延いて親子兄弟を其の渦中に入れずにはおかなかつたでせう。そして今日の宮善は夢にも見ることが出來なかつたと思ひます。

——◇——

そこがつまりお婆さんのえらい所で、何處までも理性愛により、まごゝろをもつて其の子を說得し

お爺さんをうらましめぬやうに入學を斷念めしめた所、迫ばれ現代稀に見らるゝ女丈夫であつたのです。

かうしてお婆さんには其の誠心から出發した眞の愛を以て其の子を本心から動かしたのであればこそ直治さんはお爺さんの峻拒に對して、微塵の反感を持たなかつたばかりでなく、反つてその弟妹のため、それに代つてお爺さんにお願をしてその志を成さしめたのです。それが兄弟仲を益々親密にし、今となつて尙お婆さんを中心に所謂春風駘蕩といつたやうな一族團欒を造り上げたのです。

◇

世の中には物質生活即ち經濟生活の勝利者は幾らもあります。らかしこれと共に精神生活に惠まれる家庭は何程あるでありませう。蓋し曉の星といつても過言ではありません。

如何に物質生活に惠まれても荒んだ精神生活に墮ちては、人間の全生活としては不幸な生活であります、反之肱を枕にして蔬食に甘んずる精神生活に惠まれても、物質生活の缺陷があれば亦片輪な生活であります。物心兩面の生活に惠まれてこそ、眞の生活の勝利者であります。

大小は兎に角、宮善家はかうした兩生活に惠まれた勝利者ではありますまいか

◇

恒產なくんば恒心なしと蓋し千古の名言であります。古今に通じ東西に亘つて動かない眞理であります。經濟生活は人生々活の基調ではあるが、全生活ではありません。然るに世智辛い現代人は一にも經濟、二にも經濟果ては總てが經濟生活其のものはあつて、精神生活を無視する傾向は確にあります。之れがため我が國民性から自然に發露した家庭に於ける長幼孝悌の道と溫情味がだんだんとうすらぎ、そして我が國粹である家族制度は漸次個人制度に推移りつゝあるやうです。此の現象と國家生活との關係は實に大なる問題でそして緊急な問題であります知らず〳〵筆に引きづられてとんな方面に入つて來ましたが兎に角家庭に於ける物心兩面生活に惠まれるには長幼孝悌の道を踏むことは第一義と思ひます。此の點から觀ましても私の狹い見聞に於ては、宮善家は確にその第一人者と思ひます。

尙記者は他の方面からもお婆さんの眞面目を讀者に照介したいと思ひます。それは恒治さん（お婆さんの二男）の奧さんのお話で次のやうなことであります。

「私は幼少の時母に分れたのでありますが、今はかうしてお婆さんをお姑としてお仕へしてをりますが、まるでお姑さんの樣な氣がいたしません。ほんたうのお母さんとかはらぬやうに可愛いがられ自分もさう心からしたつてをります。ですから私はたとへ早く實母に別れてもかうして實母にかはらないお婆さんに可愛がられるから全く仕合者であります。」とかういふ裏面からも愈々お婆さんの人格が窺はれるのであります。

（をはり）

智識の欄

菊のはなし

杉村松之助

白菊、黃菊、ずゐぶんと、菊には種類がたくさんあります。さて、一体、何種ぐらゐあるでせうか。菊は、日本で生れた花ではありませぬ。今から一千六百年もの昔のこと、仁德天皇の七十三年に、百濟から、青、黃、赤、白、黑の五種の菊花がはじめて、日本に歸化いたしたのです。そして、此の時の原種は、無論、今のこつてゐる筈はありませ

ん。しかし、それからといふもの、根分けに根分けが行はれなどして、方々に普及し、栽培に栽培をかさねて、だんだんと變種を生ずるに至つたものでせう。げんに、わたしが、黄菊と赤菊とを混植して、ほつたらかしておいたら、其の中間の薄赤の一品種が、この秋咲き出しました。其の間の年數といつたら、ほんの四五年のものにすぎないのです。

◇

菊花が歸化してから、さつと、五百年後において重陽の祝といつて菊の酒を呑む故實が、仁明天皇の承和二年の九月に始りました。五百年間のうちに、これほどまでに菊の趣味が普及されるものとは、歸化して來た菊花自身も、實に、意外におもつたかも知れませぬ。かくて、觀賞が盛んになるにつれて、栽培も亦次第に發達し、江戸時代の初期すなはち、元和、寛永の頃からは、其の栽培盛んになり、つゞいて、正德、享保を經て、寶暦より天明に至つて未曾有の流行を見るにいたつたのです。

◇

正德五年といへば、今から二百八年前の昔のことですが、其の十月に、京都の東山、四條、北野などに於て、九日間菊會を開き、又江戸に於て菊合せと稱し、今の菊花品評會が行はれました。其の當時の菊花の種類は、總計百五十餘種で、今日からみると、さう驚くにも當りませんが、しかし、其のむかし、たつた五種の菊花を貢がれたものが、かうまでふえたかとおもふと、やはり驚きの種であらねばならぬ。況んや、天明年間の催しにかゝる菊合せには。五百餘種に及んでゐたといふことさへあるのでこれは時の將軍家齊（第十一代）が、菊花を好愛し、大に、其の栽培を奬勵した結果によるのださうです。

◇

維新後は、いはゆる内外多事で菊花の觀賞どころではなかつたのでしたが、其の後、だんだんとすすんできて、今日この頃では、厚みのものや、太みのもの、さては、細みのもの等を總計すると驚くなかれ、二千三百種の多きにのぼつてゐるのです。

以上は日本の菊のみについての總計ですが、支那の菊や、西洋の菊などの變種までいれようものなら、それはそれは大した數になるだらうとおもひます。こゝにいたつて、わたくしどもは、生物の遺傳律や、變化律といふものは、實に、驚くべきものがあることを感ぜずには居られませぬ。

（昭和三、一一、八、夜）

折々の歌

紫波城山について御前講演せる人に

しろ山の、その起伏を、大前に、とくてふ君が、ほまれ高しも

とこしへの、榮ならまし、君が名は、紫波城山と立ならびつゝ

初秋夕陽

うすつく日、いやてりはへぬ、にしき着て、この一本を、見よとことくに

栗

つふらつふら、栗の實つふら、わかせとに、祖父や、なけし祖母やなけし

晩秋虫聲

友かきに、後れし身をは、果敢なみて、なけくに似たる、虫の聲かな

幾よさを、ねむりかねたる、枕へに、よことか細く、なれる虫の音

菊盛

行幸そと、咲ききそふかも、陸奥の、はさまの村のき菊白菊

秋の夜

秋の夜や、夢立ちまよふ、子等の上、逝きし子も集り來る夜長かな

和賀郡土澤町　よみ子

児童文苑

うちの手傳

和賀立石校　尋六　蟹澤文雄

家では今稻かりだ、昨日は日曜なので僕も手傳した、馬引は僕の仕事だ行く時は馬にのつて行くかへりは馬に稻をつけてひいて來る、さうしてお晝前はやつた。

お晝すぎから馬をひいて歩くことがいやになつたそれで今度は稻かりをした僕は庭球の時ラケットは右に持つが水をくんだり稻をかつたりする時は左だ、それで僕のかつた稻は左まるきだ、おとうさんは「さうでなくまるけ」といふ僕は二は位は右まるきにしてゐるがすぐにまた左まるきにしてしまふおとうさんは「さうではいけない」となんべんもいふ、僕はなんべんいはれても左まるきにする。

おとうさんは「お前なんかかつたつて役にたたないから馬をひいて歩け」といふ、僕はしかたなしに馬引をした。夕方は早く歸つてふろをわかした板もふいた。夕はんがすんでからみんなで栗を食ふ時、僕だつて一人前働いたんだといふやうな氣がした。

▲評いつはりのない文章であることが何よりよい事です、そして最後の夕はんがすんでから……以下の描寫は一寸子供に氣のつかない表現で讀んでゐても笑ひたくなる程うれしい……。

あゝ二十五日

和賀川尻校　尋四　高橋久

忘れも致しません八月廿五日の事です。

川邊へ遊びに行つて居りましたが、お父さんが御苦しみになつて居る樣子が目の前に見えて仕方なかつたのです。戸口に立つて「たゞ今」と言ふ聲も力なく出ました。「久」とお母さんは常とかはつた聲でした。「はい何んですか」とお母さんのおそばへ行くと、お母さんは涙ながらに「お父さんはとても助かる見込はあるまい、早くお前達は大きくなつて、御父さんの御恩を御かへしするのでするよ」といはれました。

午後三時頃になるとお父さんの病氣は益々重くなつてきて、とう〳〵午後八時半頃に、すや〳〵とおやすみになるやうになくなりました。

御母さんはもちろん、ねいさんも、妹も、袖をぬらしてお父さんのなきがらにすがりついて泣きました。あまりに悲しいので私も聲を立てて泣きました。

私はお父さんにこれまでそだてられたことを思ひ出しますと、ます〳〵聲高く泣くのでした。親類のおぢさんが「いくら泣いてもなくなつた者は生きて來るものではないから泣くものではない」と言つてお母さんの所へ五圓札を一枚くれましたがお母さんは受け取らないで泣いて居るばかりでした。

翌日さうしきがすんでからも、お母さんは、お父さんのおゐはいの前に私達を集めて、お父さんの病氣にならない前の事や病氣になつてからのことを色々と話してきかせました。お父さんがなくなつてから六十餘日になります。あゝ八月廿五日御父さんがなくなつた日だ

▲評　八月二十五日をいつまでも忘れないと同時に一人のお母さんの事を忘れてはなりません　お母さんに心配をかけずに立派な人間になることは死んだ御父さんにも孝行をすることになります。

ぶた

和賀土澤校　尋五　菊池賢三

『ありや、豚が……』

のそ〳〵と畠の中をあるいて居るぶたを見て、私はおどろいてお母さんの所へ走つて行つた。

『お母さん、ぶた出はつた』

『なに、小さいのか』

『大きいの』

『はあまんづ、それは大へんだ』

お母さんは竹きれを持つて、裏へかけて行つた。私もさほを持つて畠の中へ飛び込んだ。

『ほいしし』

『ほいしし』

と、二人で竹をふり上げて追ひまはして居ると、となりのきよみさんがかけて來て、

『なに！ぶた出はたどす』

と言つて、はだしになつて手傳つてくれた。

『ほいしし』

『ほいしし』

三人三方から追ひたてゝやうやくぶたを小屋へ追ひこんでほつとすると、小屋の後の方から、又、がりがりと音をたてゝ、畠へ飛び出さうともがいて居た。お母さんがたるきを持ち出して、小屋の後をぴんとかこつて出られないやうにした。それでも、しつこくぶたは鼻先をたるきとたるきの間からのぞかせて居るので私がさほでぼつと突くとめんくらつた鼻先が、たるきの角にぶつかりながらかくれてしまつた。

お母さんはさくぢをたくさん、たるに入れてやつた。それから、下駄をひろつてきよみさんと二人せきへ足を洗ひに下りて行つた。——ぶたも、あんまり暑いので出たかもしれないな——私は畠ごしに、土手のかげで足を洗つてる二人のせ中を見ながら考へた。

▲評　會話を入れた作文をこれだけに書きあげたことに全く感心します。

◇

弟と喧嘩して

和賀郡土澤校　尋六　平野定男

僕は此の頃、弟と喧嘩をしなくなりましたが、まだ時々喧嘩をすることがあります。

此の間の雨の降つた日曜日のことです。遊にも行かれないので、家で弟を相手にかるた取をして居りました。二三回すると、弟が

『兄さん上手だから、讀んでから取るのす』と言つた。そこで僕は少しゐばつて

『うん、おれは讀んでから取つても負けないぞ』

と言つて讀んだ。讀んでから取るのは中々むづかしい。一回目はたう〳〵弟に負けた。そして二回目も三回目も續けてまけた。

弟は胸をはり上げてゐばつた。そして、

『わがはいのうでまへはざつとこんなもんだ』と言つた。僕はくやしくてたまらない。そこで僕は讀む前に、こんどよむのを一通りよみ、こんどは取るのを見まはした。なか〳〵みつからない。やう〳〵見つけた。そこで僕は「春すぎて……衣ほすてう天のかぐ山」と讀み上げて、さつきみつけておいたのを取つた。そして、何んとも言はないで、笑ひながら見てゐた弟は僕の取つたのをしらないのか目をキョロ〳〵させながら夢中になつてさがしてゐたが、やがて大きな聲で

『みつけたッ』と言つて一枚のかるたを取り上げた。

『どれ』僕は笑ひながらそれを見た。見るとたしかに「衣ほすてう天のかぐ山」と書いてある。おやと思ひながらさつき僕のとつたのを見た。するとそれには、

『衣かたしき……』と書いてある。僕は此の時怒つてよいか、殘念がつてよいかわからなかつた。こんどこそと、又さつきのやうにして、それからよんだ。今度はほんたうである。

こんなことを何べんもしてゐる中にとう〳〵弟にみつけられてしまつた弟は怒つて、

『づれ(づるい)がべんちや』と言つて、僕がていねいにならべておいた、僕の取つたかるたをつかんでなげつけた。そこで僕も弟の取つたのをそこいら一面になげつけた。

弟は、

『何すて、なげだとす(どうしてなげた)』と言つて僕も弟のまねをして、

『何すてなげだ』と、まぜつかへした。

『兄さんずれがらす』弟は何んなく答た。

成程僕が惡い、何んとも言へないのだ、

『何んだと〳〵』とくりかへしながらげんこつをこしらへた。弟は目に涙をためて、

『なにすどす』と言つてゐる。

そこへ母が來た。母はしづかに、口を切つた。

『何すてる相變らず、兄弟喧嘩は盛んだな』と笑ひながら言つた。僕の顔はほとつた。そしてあぶらあせがたら〳〵と流れ出る。母はさらに言葉をつゞけて、

『お前伊藤小左衛門の本を讀んでらつけな、あれに、何といふことが書い

てあつたけ』と言つた。そして最後に、お前は兄のくせに、弟ばかりいぢめてゐる。そんなことでいかんぞ』と言つた。そして母はどこかへ行つてしまつた。

ふと、さつきかるた取をした所を見ると弟がだまつてかるたを箱に入れてゐた。僕は弟の泣顔を見ると、だまつてゐることが出來なかつた。かけよつて、僕もかるたを入れた。箱をしまつて外に出た。

僕はまだ教科書でおそはつた伊藤小左衛門のことを思つてゐた。僕があまり弟とけんくわをしなくなつたのはそれからです。

▲評　自分が惡いと知りながら弟をいぢめようとするのは惡いことです、羨しかるたを箱に入れてゐる弟に手傳つた心持等は美しい、あなたの御母さんも偉い。

秋の朝

稗貫花卷校　尋六　尻谷尙

日曜日の朝僕は誰よりも早く目を覺ました。「あー」とあくびをしてひよいととこからはね起きた。家の中を見まわすと僕よりとつくにお母さんが起きて臺所ではたらいて居つた。僕は着物を着かへて顔を洗つてすぐと外へとび出た。外へ出ると顔がひやりとして冷たくなつた。そこらへんを歩き廻つて「ふん」と言つてそこへかゞんでしまつた。

空は晴れてところ〴〵にちぎれ雲が散らばつてゐる。西の空を見ればまだありあけの月がさあつと殘つてゐる。

そよ〳〵と吹く風につれて秋らしい氣分が身にしみて來る。僕のそばを見れば山櫻も秋の氣分になつて紅い葉をちら〳〵見せる。僕は急にのつしり立つて山櫻の木をぎつしりにぎりゆつゆつとふると紅いもみぢのやうな葉がちら〳〵ちつて來るすると兄さんが來て「その木をそんなにふると折れてしまふからな」と大きな聲でさけんだ。僕はびつくりして兄さんの顔を見た。と兄さんはまだ顔も洗はないで外へ出てゐる。僕は「兄さんのねぼすけ」と大きな聲でさけんだ。すると兄さんが「尙さんは今日初めて早く起きたからいばつてゐる」と笑つて居つた。僕はたゞ「兄さんのねぼすけ〳〵〳〵」とやじつた兄さんはとう〳〵かんしやく玉が破裂して「生意氣」だと言つて僕を追ひかけて來た。僕は一生懸命逃げ廻つた。兄さんは半分までは追ひかけたがすぐさま家へ引きかへしてしまつた。

僕は「あゝあつい」と手ぬぐいをとり出してびつしよりぬれた汗をふいてゐると又さあー〳〵と涼しい秋の風が僕の汗のついた顔をなでゝ行く。僕はまるで生きかへつたやうにピン〳〵となつた。

家へ入らうと思つて中へ入ると皆はもう起きてごはんのしたくをして居た。

▲評　秋の朝らしい感じがよく出てゐます、兄さんだつてほんの氣になつてあなたを追ひかけたのではないでせう。毎朝早く起きてお勝手の御手傳をもしたらどうです。

乞食

黒澤尻小學校　高一　高橋やそ

…◇…

七時半頃ごはんをたべようと思つて飯臺を出して椽側の方を見ると「お願ひします」と椽側の眞中に立つた乞食がある。私はびつくりしてはだしのまゝ裏口から飛び出してお父さんの居る所へ入つて「おかしな者來たつけ」といふとお父さんは「ほう」といつたまゝ庭へ行つた。私も裏口の方へ足音を立てないやうに行つて内をのぞいて見た。

するとさつきの乞食は今度は戸口の方へまわつて内を見てゐた。又びつくりして小屋の方へ走つたが、又足音をたてないやうにして來て裏口からのぞいて見たら、お父さんが私に「何かけてやれこの人さ」とおしやつたので、お母さんがあんな人に物をくれる時や米をくれるつけと思つて、皿に米を入れて乞食のそばに持つて行つた。すると乞食は小さな聲を出して口

を開けたので袋へ入れたあとで袋の中を見るとまだ少ししかたまつてゐない。私はもつとくれればよかつたと思つた。それは女の四十ばかりになる人で背中には四才ばかりになる男の子をおぶつておまけに何か重さうな荷物を負つて居たから…お父さんが「お前はどこだ」といふと

「秋田です」

「お前一人？このわらすと？」

「いいえ、おやぢと息（むすこ）二人あつたんでげす」

「おやぢ何仕事してた」

「れう師で去年むすこ二人つれて船にのつてれうに行つたんでげす、其の中手紙なり來るかと思つて待つたが、さつぱりたよりがない。或る日おやぢの乘つた船じるしの板が濱邊についたので、死んだと思つてこつちの方さ出かけて來たんで、家にや食物もなくなつたし……。

「お前秋田だねえな」

「大槌です」

「ふうん、秋田だら……だつて」

「生れ秋田で大槌に來たんで」

そのときお母さんも外から來てお父さんの話を聞いて

「どごさとまるべ」

「とめるどこあつたらとまるし、あとこつちの方に家ない？」

「おれの家すかない。ずうと行けば黒岩に行くによいが、こんなに暗くなつては行きさうねえ」

「あゝこまつたなあ」

と乞食は首をたれた。せ中の子供は

「水こ、みづこ、みづこよ——」

と言つたので乞食が私に

「姉さんどうぞ水一杯下さい」

私はくみかけの水を茶椀にいつぱいくんで乞食にやつた。乞食は子供にのませあまつたのを自分がのんで

「どうもありがたう」

といつてよこした。そのときお母さんは

「どうせ暗くなつたし、おら家さとまれば、えゝや」

といふと乞食はよろこんで、

「どうもありがたうございます」

と入口にはいつて子供をおろし、荷物もおろし、わらじをといて、私のがつぱをもつて來た。

…◇…

お父さんが、

「それそこに足たらひさ水くんでらから、それで洗つてよい」

「はあは」

といひながら足を洗ひはじめた。乞食の子供はせ中からおりると、すぐどんどんそこらをはねまわつたりして臺所に來た。

「こいつなにだ？だーごーが」

私はだまつて居るとその子は、

「おーがーやー」

と母をよんだ。母は

「はーいー」

と返事をしながら中にはいつた。そして子供に小さいりんごをくれた。子供はよろこんで又はねまはる。家の人達も家の中に入つた。お母さんが

「おれおまたくからそこらしまへ」

といつた。お父さんはおみやげにもらつたせんべえをその子供に五六枚くれた。乞食は臺所へ來て

「あゝこはい〈〈」と足を長くのばした。子供は母にもらつたせんべえをやると、母はそこにおいて、自分もたべ、子供にも食べさせた。髪は幽霊のやうにもさくさして、何だかしらみがゐた樣にしてゐる。顔は赤く長くて……男の子は袴肩をおとし、手ぬぐひの樣なものを帶にし着物は一ッ身おまけに腹がふくれてたぬきのやうだ。お父さんは乞食に

「お前年なんぼだ」

「おれえすか。おらあこれでも三十五だ。あんまり年よりくさいので、みんなにほうてたまげられてしまふ」。

「はああ……」

とお父さんが笑つた。そして男の子に

「年なんぼだ」

と聞くと、男の子は指を三つ折つて「三つ」と答へた。乞食はだまつてにや〈〈笑つて居た。そのとき母はそばから

「お前のむすめなんぼだ」

「大きいの二十二に小さいの十七だんで」

すると父は

「おやぢなんぼ」

「四十五おれ親子船にのんねえだつてもきかないで三人でのつたから死んだべ、死ぬ前にや何かかにか言ひのこして行くもんだ。行くときや『ぼんがねとつてきて、ぼんだなでおどりをおどるんべつて言つてたんでげす、どごでぼんだなでおどりおどるなんて、おれだらぼんだなでおどらないけど、ざしきだればなんぼもおどる」

すると母は

「お前おどり踊るですか」

「はあおどりもおぼえだし、おどつてもあるいたし、おどり道具もあるし歌もおべた、そりやうそだらばんげおどつて見せるから、おらあうそ言はねえから」

と言ひながら大きな荷物から三味線を出して來た

「これでもここぶつこれてらゝここちよつとこさへればよいがよ」

と言ひながら私の顔を見てにやりと笑つた、お母さんが湯に入つて上つたので私がはいつた。やがて上つてだい所に來るとお父さんが乞食に

「お湯さ入つてんぜえや」

……◇……

「はいありがたう」

といひながら子供に

「がつぶさ、はいれと、がつぶ〳〵さ、ののげ」

と着物をぬがせてやつた。体には守札がついてゐる。

「こりや成田山だもえ」

と乞食は子供のからだから札をとつた。そしてすぐ二人お湯に入つた。そのうちにごはんも食ふによくなつて子供をよんだ。みんな飯臺に向つて食べはじめた。子供は、ごはんをあらかたこぼしてゐる。お父さんかそれを見て

「ほう！ほした事〳〵、たまげてほした。こりや

「明日天氣よいな」

といふ。乞食は子供のこぼしたごはんを拾つて食べて居ましたが、しばらくたつて子供の自慢をはじめた。大へんめごいのよい子だのつてほめて居たが自分の手を出して

「これおれの手をなごの手だないも、男みたいだうだからおら何でもかせぐおれの位かせいだものなかんべえ」

などゝ自分ばかり偉いものやうに言つたので私は少しにくらしくなつた。ごはんも終つてあとしまひもし、座敷へ來てしばらく日記をつけて居ると子供が珍らしさうに

「こいつなんだ。ペンコが」

と私のペン入れをもつて遊んでゐる。書き終つて乞食をねせる床をとり、私はねてしまつた。

翌朝目をさますと、乞食等は起きたと見えて笑つたりしてゐる音が聞える。私は起きて朗じまひをしごはんをたべるによいやうになつたので、乞食にたべさせた。子供はおしるをのこして飯臺をたつた。母親も立つた。私は「ずゐぶんぜいたくな人だ、子供がのこしたおしるも食はないなんて」

とお母さんに言つた。お母さんはだまつてゐる。お母さんは乞食のおべんとうにといつて、べんとうにごはんを入れて居る乞食等はごはんをたべてしまつたのでもう行く仕度をしてゐる。お母さんはごはんを乞食にやりながら、

「こいつあひるになつたら、わらすさ食はしてえぜ。わらすはらへるんだから」

乞食はうれしさうに

「はえありがたうげす、おかげで」

と言つて子供にくつをはかせた。自分もわらじをはいて板の間に手をついて、

「どうもありがたうげすおかみさん」

といつた。お母さんは

「それではしづかに氣つけて」

といふと乞食は

「ありがたう」

三いつて子供の手を引いてとぼ〳〵出て行つた。

▲評　これを讀んで乞食の醜さよりもあなた方一家の美しい人間味に頭が下ります、もう少し形式をかへると立派な短篇小說としてはづかしくないものになりうと思ひます

◇

ひしの實

稗貫矢澤校

等五　熊谷臣雄

僕は昨日二三君からひしの實をもらつた。そして兄さん達の庭球を見ながら、止めるのを待つてゐた。その中に兄さんも佐吉君も止めて家に歸ることになつた。皆は一緒に歩き出した。

いつも水車の所まで來た時である。僕はひしの實を出して見せた。すると佐吉君は

「そへヅァ木だな」

と言つた。僕は負けんよ

「そだねェな」

と言ふと、兄さんが見てゐたが、

「つぶして見れば一番いゝんだ」

と言ひ出した。僕は

「つぶさない。なんたつてつぶさない」

と言つたが、兄さんは食べたくなつたのか、自分でもつぶさないといつて居たが、突然

「いゝんだ！」

と言ふひようしにくわッとつぶし、ゑり止めの針でえぐり出して食べて終つた。

僕は胸はムニャ〳〵となつたので

「えつこだなウフ……」

と泣くまねをした。すると兄さんは

「ゑり止めをけるからいんだ」

とばかりにかけ出して、その日はそれきり家に歸つた。

今日又善孝さんから、ひしの實をもらふことにした。

▲評　善孝さんにもらつたのは誰れも、つぶさなかつたのですか。つぶされたゝめに、ひしの實をしらべることができたかもしれませんね。

◇

みよちやん

和賀黒澤尻校

高二　及川くに

私とみよちやんとはあまり仲のよい友達ではありませんでした。みよちやんは小さい時にお母さんに死なれて、お父さんと二人でさびしく暮してゐたのです。みよちやんは大きくなるにつれて人の物をとるくせがありました。近所の人達は「取るのではない」といくら教へてもすぐとるので、誰もみよちやんに同情する人はありませんでした

みよちやんは學校にはいつても學校に行かないで、小さい子供等といつしよに遊んでゐるのです。お父さんが學校までみよちやんをつれて來ても、かくれて家に歸つて小さい子供等と遊ぶのです。そして小さい子供等に家から物をもつて來させてそれをとりかへしてしまふのです。

みよちやんは學校に行かないものですから二回も落第したのです。

みよちやんのお父さんの家はもとは立派な家▷つたそうですが、お酒をのんで財産をなくしてしまつたので、今では小さい家を借りて、みよちやんと二人で暮らしてゐる

のです。お父さんはお酒をのむとみよちやんをいぢめるのです。ですからみよちやんはお父さんがお酒をのむとかくれて家に居ないのでした。お父さんがみよちやんがゐないのでみよちやんの名をよびながら町の中をさがんで歩くのです。みよちやんはお父さんがねてしまつてから、家にはいつてねるのです。

お父さんはみよちやんが學校を卒業してすぐ水澤に賣つてしまつたさうです。みよちやんは自分の買はれて行つた所からこの町に歩いて來たさうです。そのとき顔におしろいなどをぬつて町をうろ〳〵して歩いて居つたが水澤からむかひが來てつれて行かれました。

しばらくして八月の中頃又水澤から歸つて來ました。それつきり病氣になつてそのまゝ床をたてなくなりましたのです。

お父さんはみよちやんが病氣になつたのに醫者にもかけずに、酒ばかりのんでゐるので、見るに見かねた町の人達は醫者をたのんで、みよちやんを見てもらつたら赤痢だといはれました。町の人達は一時大さわぎをしました。そしてみよちやんの家のそばに誰もよらなくなつた。

まもなくみよちやんは九月一日にあの世の人となつてしまつたのです。

お父さんは形ばかりの葬式を役場にたのんでしてもらひました。お父さんは墓場に花もあげずに酒ばかりのんでゐるのです。

私はみよやちんの墓に花と線香をあげて來ました。みよちやんの墓は唯土をかぶせてその上に板に書た札をたてておくばかりで、何もあげてゐなかつた。みよちやんはいおめらる父のそばに居るよりも、かへつてやさしいお母さんのそばに行つてどんなに幸福でせう。

▲評　さあお母さんのそばに行つて幸福にくらしてゐるでせうね。それにしても、あなたにいただいたお花とお線香をばどんなにありがたがつてゐるか、はかられまんね。

◇

あるばんの出來事

稗貫花城校　等四　熊谷ケイ子

九時頃でした。私はお母さんたちとお話しをして居りますと急に鳥小屋の中でひよこのなきごゑがしました。私はそれで女中とちようちんをもつて鳥小屋を見ると三びきのひよこが一びきは頭から血をながしております一びきはすみの方でないて居ります。一びきはもう死んでおります。私はすぐに女中と死んだそのひよこをあかるいところにもつていつて見ますとおどろくではありませんか、さきに頭から血を流しておつたひよこはもう死にさうになつて、いきはたへんとしてゐましたしたが水をもつてきてやつたりしたのですこしはげんきになりました。一びきはかはいさうに死んでしまいましたがまもなく殘つた二ひきは鳥小屋でなかよくあそぶやうになりました。どうしてけがをしたのか私にはわかりませんが、皆なは猫かいたぢでせうといつて居ります。けれどもひよこが一びき死んで二ひきはどんなにさびしいでせう。

▲評　常にひよこをいたはつてをつた、あなたの一念が、かうも、夜中、元氣で、鳥小屋にいかれたのでゐうね。

◇

豫防注射

稗貫花城校　等六　中村正

むねがざわざわする。注射をしたことがないからどんなにいたいだらう。ある人の話によれば余りいたくておきられないさうだ、又別の人の話は少しもいたくないといつた僕は誰の話も信じられない。

二三寸も肩へ平氣で針をぶつつりとさすんだから少しもいたくないことはあるまい。またおきられない程いたいだらうかまさかそんなにいだい事はないであらう。一人一人すすんでくる。すすめばすゝむ程僕の胸はなほざわざわしてくる。とう〳〵僕の番にきた。醫者は笑ひ乍ら成績はよいか運動はよいか、けがをしないかと僕にきいた。やがて醫者は『れいてん二(0.2)』といつた。そしてせなかの方に來て僕のかたをぎりつとにぎつた。僕はいたいと思ふとはりがずぶりとかたから肉へ入つた。つーつと冷い水のやうなものが体へまはつた様な氣がしたらやうやく注射もすんだ。僕はほつとして家にかへつた夜に僕は急に息が苦るしくなつて來た。あほむきながら肩を上げるととてもいたくなつた。そして一時間ばかりとこの中で苦るしんでゐた。苦くするとあの人の言つたことがほんとうかも知れない

▲評　豫防注射の発音が、あり〳〵とあらはれてゐます。

童謡に就いて（1）

霜夜の狐

土澤小學校
高橋芳夫（寄）

随分寒くなりましたね。釜山の紅葉も、なんだか冬枯れの姿に變つて行くじやありませんか。間もなく、静かなふるさとへ、白いものがやつて來るのですね。

この前は、「玩具の船」のお話でしたね。みなさんがあれを讀んで呉れたでせうか？皆さんの中、一偏でも童謡製作をした人、又は、童謡を好きだといふ人達は、きつと、目を通して下さつたことゝ信じてゐます。

今回は、かあいゝ童謡二つかきませう。

小猫

こねこよ
ニヤオン〳〵て
何んのこと
私にちよつと
おしへて
おくれ

（及川昌治作）

小猫―かあいゝですね。こねこよ―と呼びかけてゐる昌治君の姿が見えるやうですね。昌治君のこゝろもうたも、そのまゝの姿、自然の姿なんです。こねこよ―と、ほんとうによびかけたのじやないのだけど、こねこよと呼びかけて見たい心持をあらはしたのです。作者の優しい心と、可愛らしい小猫とがほんとに一つになつておどつてゐるやうなこの童謡をよく味はつて見て下さい。

この童謡は私をして幼い頃をおもはせるものです。炉縁の上なんかで、眠くなつてじつとしてゐるかあいゝ小猫に向つて何かきく心持になります。

この作品は昌治君が尋四の時の作品で、昌治君は今は中學校の一年生です。私は三年も會ひませんので昌治君が大きくなつたのを知らないから、この童謡をつくつた當時の小さい姿しか覺えて居ません。

今昌治君がこの童謡をよんでみたらどんな感じを抱くことでせう。

霜夜の狐

コンコン
霜夜の狐
寒い聲出した

霜夜の狐
寒い聲出した

（平澤サト　豆の兄弟より）

木の葉も枯れ落ちた冬枯れの寒い朝夕、山の奥から、林の中から、はては家の裏の藁小屋のかげから、コンコンの聲が、静かな空氣を破つてきこえて來るのです。

霜夜の狐―なんだか、寒氣がして來ますね、コンコンは透き通うてゐますね。『あす朝は霜か』とおもはれる寒い晩、裏へ出てみたら、しんとした向ふの林の中から、コンコンのやつが、さも寒げな―寒い晩ですよ―しんとした林の中を月でも出てゐたらうか―透き通うるやうな聲で囁き出すんですね。

コンコン
霜夜の狐
寒い聲出した。

もう一度いつてみよう。

コンコン
霜夜の狐
寒い聲出した。

そこで、感じのいゝ童謡が出來上つたのです。

コンコン
霜夜の狐
寒い聲出した。
コンコン
霜夜の狐
寒い聲出した。

では今回はこれで―。次には又炉縁にでもあたりながら、しんみりとお話いたしませうよ。

十月の山驛

小原　孤羊

秋雨にぬれし山驛よ
堅庭に―
つどへる子等と「クニトリ」をする

×

午後の汽車―
待つ人の來ぬ淋しさに
貨車にとまりし「トンボ」など數ふ

編輯室から

■創刊號の發行期日は十一月三日でありますが、事實上の發行は餘り遲れて、皆さんに對し本當に相濟みません。實は印刷所の方からは十月廿日までに、原稿を締め切つて送つてくれとの要求で御座いましたが、私共の方では、前々から直接學校を訪問したり、失禮とは萬々承知であつたけれども手が足りないところから書面を以て原稿を御願致しましたけれども、學校の方でも十月中は大演習であるとか運動會であるとか其の他色々な事情があるところから、自然原稿の作成も廿日迄に出來兼ね從つてとう〳〵廿六日に原稿の編輯を終つて送つたのであります其後印刷所の方では是非發行期日（第一土曜）迄に發行しようといふので、一生懸命馬力をかけてくれましたが、何せ印刷所の方でも、かういふ仕事には不慣れでもあるし、第一號に限りページ數も多く、又發行部數（七千部）も多い、それに加へて大演習前後の關係の印刷が多い爲め、普通の印刷を後廻しにしてたゝんでおいた仕事が澤山あつたため、更におまけに公休日も續くといふやうな理由で、印刷もだん〳〵おくれて參り、やつとのことで十一月三日には三分の二即ち十六頁だけの校正が出來るやうになり、其の後又次々とやつて、漸く七日に校正だけ終つたのです。それから印刷所の方でもどん〳〵刷つて十二日にやつと出來上つたのです。全くかういふ事情でおくれたのであります。それが引いて本號のおくれとなりましたから、讀者諸彦の何分の御諒察と御勘辯を願ひます。現在私共の手元にある原稿は第三號と四號とを編輯するに充分な位整つてをりますけれども第三號は第三土曜（十一月十七日）に發行するわけにいきませんから、本週は止むを得ず休刊と致し、第四土曜（十一月廿四日にかつきり發行することに致しますから左樣御諒承を御願ひ致します。

■第二號からは色々な講座を設けることゝ致し、各方面から原稿は頂戴してをりますが、如何せん紙數に限りがあるのですから、一時ではなくだん〳〵と載せることゝ致します。是れ亦御諒承を御願ひします。

兒童作品懸賞募集

第二號の懸賞募集を致しますから皆さん振つて寄稿して下さい

◇注　意◇

△作品は綴方、童謠、短歌、俳句。
△入賞者には賞品を贈呈します。
△締切は十一月十四日。
△用紙はなんでもよろしいが字詰は十一字にして下さい。
△學校名、年級、氏名は是非記入して下さい。
△宛名は花卷川口町『子供の力社。』

■懸賞本號に載つた兒童作品は入賞のものばかりです。

子供の力（毎週土曜日月四回發行）

普通	冊	定	價
一	冊	四	錢

●郵稅は金壹錢代用切手の事●郵稅は金十錢也

定價		
半ケ年	一ケ月	十六錢
九十錢		

●郵稅は金壹錢代用切手の事●郵稅は金十錢也

昭和三年十一月十五日印刷納本
昭和三年十一月十七日發行（第二號）

發行兼編輯人　金澤秀次
印刷人　石川安藏　岩手縣花卷町
印刷所　杜陵印刷所　岩手縣盛岡市紺屋町

發行所　岩手縣花卷川口町　子供の力社